

トルコギキョウのロゼット性

1. はじめに

トルコギキョウは、は種直後から本葉4～5枚展開期まで高温に遭遇するとロゼット化する性質がある。このため、年内収穫を目標とした促成作型において、自然温度で育苗した場合、育苗期が高温期にあたるので、多くの苗がロゼット化する。そこで、定植に先立って低温処理を実施し、ロゼット打破が行われるが、現状の技術では、低温処理開始時にロゼット化した株とロゼット化していない株が混在しているので、低温処理中に節間伸長を開始する株が発生し、開花期や切り花品質のばらつきの原因となる。そこで、ロゼット導入の難易（ロゼット性）に関する品種間差異及び、温床を利用した育苗によるロゼット化具合について調査したので紹介する。

2. ロゼット性の品種間差異

試験は、6月14日に各品種288穴のセルトレーには種し、室温または、セル内の地温を最低25℃に設定した温床で育苗し、7月28日に無加温ガラス室に定植、10月28日に抽苔の状況を調査した。

10月28日の調査時、株の状態は、全く節間伸長が見られないもの（ロゼット株）、節間伸長が見られたが、節間が短く、株もとのロゼット節数が4節以上で、調査時に発らいしなかったもの（半抽苔株）、正常に抽苔し、かつ調査時に発らいまたは開花していたもの（正常抽苔株）の3タイプに分かれていた。

抽苔不良株の発生率は、品種間差異が大きく「あすかの波」では100%であったのに対して「ミッキーバイカラーピンク」では2.2%となった。また、「ミッキーバイカラーピンク」を除くすべての品種で、地温25℃区が無処理区に比べてロゼット株率や半抽苔株率が増加して、正常抽苔株率が低下した。

3. おわりに

トルコギキョウのロゼット導入条件は平均気温25℃以上かつ夜温20℃以上とされている。しかし、品種によってはこの条件下ではロゼット化しない株が混在することがわかった。また、殆どの品種

で、地温25℃区では無処理区に比べてロゼット株率が高くなったことから、ロゼット化しにくい品種でも、育苗時の温度をさらに上げることにより、ロゼット化させることが可能なものと考えられる。

（園芸部 嶋本 久二）

表1

トルコギキョウにおけるロゼット性品種間差異

品 種	育苗地温	ロゼット株率(%)*	半抽苔株率(%)**	抽苔不良株率(%)***	正常抽苔株率(%)
あすかの波	地温25℃	97.8	2.2	100.0	0.0
	無処理	79.2	20.8	100.0	0.0
あずまの粧	地温25℃	85.4	10.4	95.8	4.0
	無処理	62.5	25.0	87.5	12.5
あずまの桜	地温25℃	93.5	6.5	100.0	0.0
	無処理	62.5	16.7	63.3	16.7
あすかの桜	地温25℃	63.4	27.0	85.4	14.6
	無処理	57.4	19.1	76.5	23.4
あずまの紫	地温25℃	71.7	19.6	91.3	8.7
	無処理	45.8	16.7	62.5	37.5
あずまの調	地温25℃	66.7	19.0	85.7	14.3
	無処理	39.7	17.4	56.5	43.5
ミッキー ピンク	地温25℃	37.8	26.7	64.5	35.6
	無処理	27.1	16.7	43.8	56.3
里の粧	地温25℃	26.1	43.2	69.3	30.7
	無処理	15.9	23.9	39.6	60.2
あずまの薫	地温25℃	28.6	14.3	42.9	57.1
	無処理	25.5	10.6	36.1	63.9
あすかの粧	地温25℃	27.3	40.9	68.2	31.9
	無処理	17.6	17.6	35.6	64.4
ミッキーバ イカラー パープル	地温25℃	11.1	26.7	37.8	62.2
	無処理	6.5	6.5	13.0	87.0
ミッキーバ イカラー ピンク	地温25℃	0.0	2.2	2.2	97.8
	無処理	2.2	0	2.2	97.8

注) 6月14日には種、7月28日にガラス室に定植、10月28日に調査。
* 調査時に節間伸長が全くみられなかった株の率、伸長は開始していたが節間が短く、発らいにはいたっていなかった株の率。
*** ロゼット株率+半抽苔株率、*** 調査時正常に抽苔し発らいまたは開花していた株の率。

ロゼット 茎の節間が詰まり、葉が重なり合い、地際部から放射状に葉が配列した植物の状態をいう。（バラの花弁状に見えるところから“ROSETTE”と呼ばれる。）